# 中山間地域における産業構造の再編過程

## ― 京都府弥栄町の実態報告 ―

荒木幹雄　荻　大陸　溝渕信定　宮永昌男

## はじめに

本稿は、京都創成大学から助成を受けて行った共同研究の中間報告である。

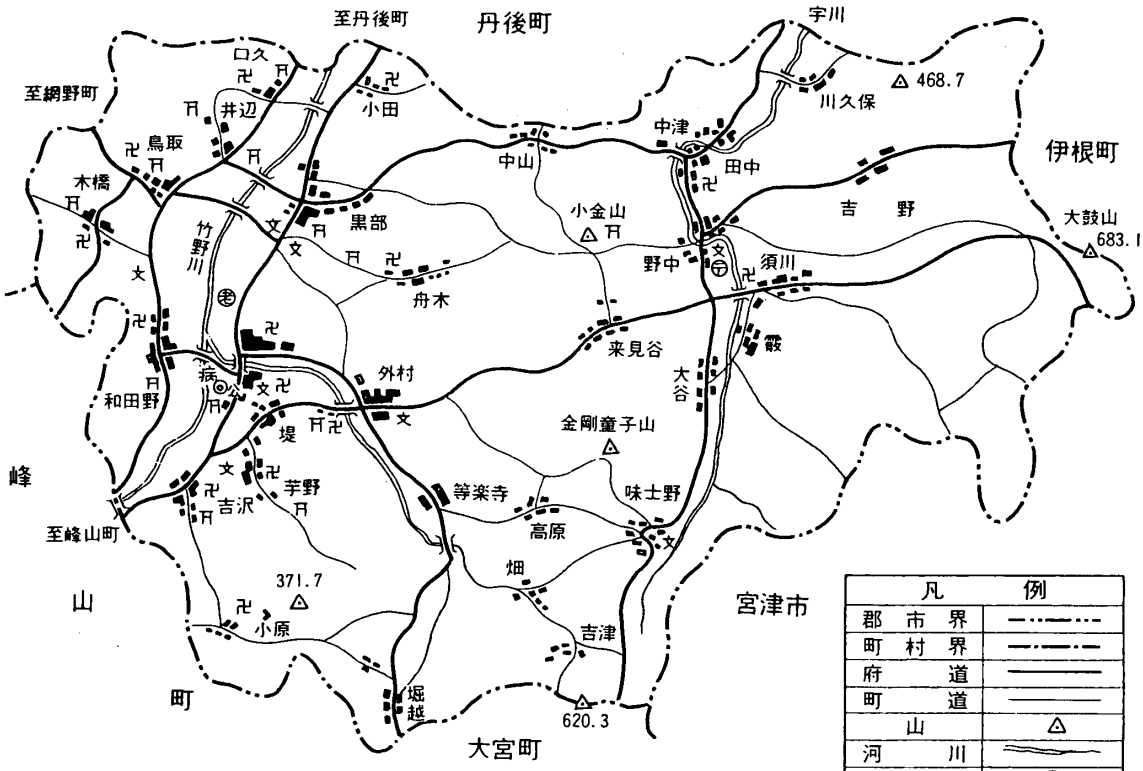
われわれは、近畿北部地域の産業と生活の実態を知りたいと考え、まず2002年及び2003年の2回にわたり、森野教授のお世話により、京都府竹野郡弥栄町へ実態見学を行うことができた。弥栄町関係者の方々、弥栄町在住の機業関係者、農家、観光関係者をはじめ多くの方々から親切なご教示を受けることができた。ここにその一部を記録として残すこととした。ご協力いただいた方々に心から感謝するしだいである。

執筆分担は下記のとおりである。

| | |
|---|---|
| 第1章　地域社会の構造変化 | 宮永昌男 |
| 第2章　農業農村の再編過程 | 荒木幹雄 |
| 第3章　人口減少地域の高齢者対策 | 溝渕信定 |

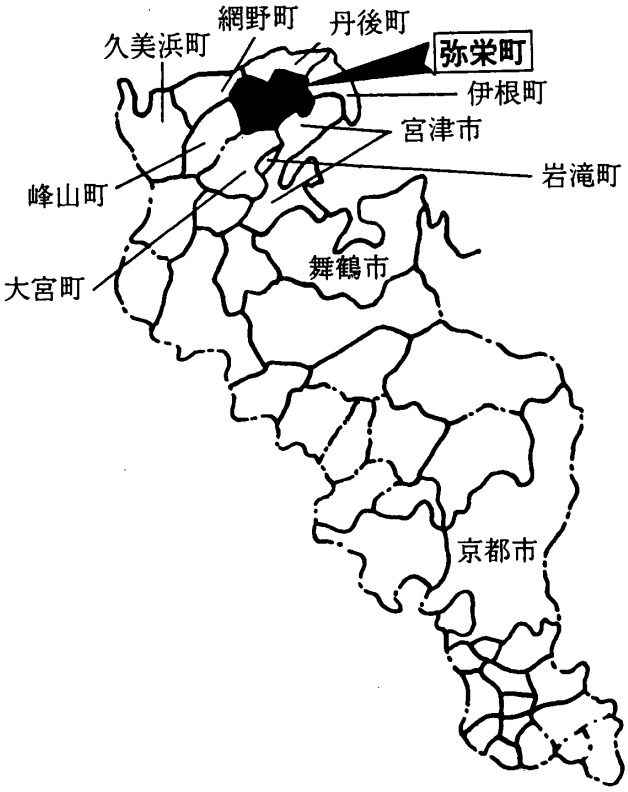
受理：2003年9月24日（成美学会）

## 弥栄町全図




| 凡 | 例 |
|---|---|
| 郡市界 | |
| 町村界 | |
| 府道 | |
| 町道 | |
| 山 | △ |
| 河川 | |
| 役場 | ◎ |
| 公民館 | 公 |
| 病院 | 病 |
| 郵便局 | 〒 |
| 保育所 | 保 |
| 学校 | 文 |
| 寺院 | 卍 |
| 神社 | ⛩ |
| 養老院 | 老 |

注：1965町勢要覧より



# 第１章　地域社会の構造変化

## １．沿革

古代丹後地方には、ヤマト政権に支配されない、独自の文化を持つ強力な大国があり、大陸との交流も盛んに行われていたことが、明らかになってきた。弥栄町はそのような出雲文化の流れを受け、古くから絹織物と農業を中心に栄えてきた。天平時代には、町内の鳥取郷から“あしぎぬ”が、芋野郷から“赤米”が朝廷に献上され、あたかも、天平文化を衣食の面から支えていた記録が伝えられている。奈良岡遺跡には、最古の玉つくり工房跡の遺跡があり、また遠所遺跡群からは、わが国最古級の製鉄遺構が出土して、この地を中心に、大がかりな鉄生産が行われたと見られている。

1869年の廃藩置県で久美浜県、1876年京都府に編入、1889年町村制実施に伴い、吉野、溝谷、深田、鳥取、野間の各村が誕生、1933年に野間村を除く4カ村の合併で弥栄村となる。1955年弥栄村と野間村が合併して、現在の弥栄町が誕生した。

## ２．地勢・交通

弥栄町は京都市から北へ約150km、府北部の丹後半島の中央に位置し、面積は80.38平方km、地形は、丹後半島を北流する竹野川沿いに約600ヘクタールの肥沃な耕地の広がっている平野部の弥栄地域と、急流の宇川が北流し、標高683メートルの太鼓山、613メートルの金剛童子山などの山岳と、広大な山林をもつ山間部の野間地域とに大別される。竹野川沿いに広がる約600ヘクタールの美田は、府下有数の穀倉地帯として有名で“おいしい弥栄のコシヒカリ”として好評を得ている。

1963年1月2メートルを越す豪雪があり、住民生活に致命的な打撃を与えたが、1971年から2000年の30年間の年間平均気温は13.9℃、同じ30年間の平均降水量は2,150.1mmとなっており、丹後地方特有の気候である。

弥栄町には国道と鉄道がなく、交通機関の中心はKTR峰山駅である。峰山駅から町の中心までは丹後海陸交通バスで約10分、クルマで福知山から約2時間45分である。

## ３．産業構成

産業構成の問題を見る前に人口動態の概況を見てみよう。

高度経済成長時代の1960年以降、農家人口は全国的に急激な減少傾向をたどったが、弥栄町においても同じであることはいうまでもない。1971年龍谷大学が弥栄町の野間地区を対象に調査した「過疎地域における職業移動の実態—京都府弥栄町の場合—」によれば、「農家の増減による移動の主因を世帯主の職移動にあるとみなし、この異動が35年以降に増大の傾向が見られることは、

いわゆる挙家離村の増加を示している」と分析している。この論文が発表されて32年経った現在、その後も変わることなくこの傾向は続き、農村自体の解体とも言われるまでの限界に近づきつつあるとさえ考えられている。そのことはいうまでもなく第3次産業部門の肥大化、すなわち「サービス経済化」の進行に他ならない。

現在、弥栄町の世帯は1,826、人口は6,091人、転出入人口差84、人口増加率は－2%であるが、その内0～14歳が15.9%、15～24歳が10.4%、25～64歳が47.1%、65歳以上が26.5%となっており、生産年齢人口は57.5%である。さらにこれを分けると、第1次産業に12.9%、第2次産業に40.2%、第3次産業に46.9%が従事している。これらの数字は丹後半島の他の町と比べてもとくに大差のない平均的なもので、ただ峰山町だけが7.5%、37.0%、55.5%と、都市化の進行状況を反映しているが、弥栄町もいずれはこの比率に接近していくであろうことは想像に難くない。

次に1996年における産業別の就業者はこうなっている。

| 業　種 | 総　数 | 鉱　業 | 建設業 | 製造業 | 卸・小売業 | 金融・保険業 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 事業所数 | 627 | 3 | 67 | 376 | 66 | 4 |
| 従業者数 | 2,498 | 21 | 362 | 998 | 252 | 23 |

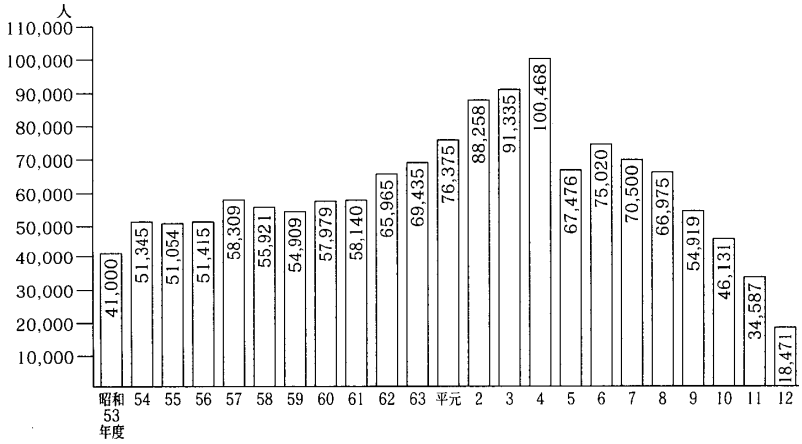
| 業　種 | 運輸・通信業 | 電気・ガス・水道業 | サービス業 | 公　務 |
|---|---|---|---|---|
| 事業所数 | 3 | 1 | 101 | 6 |
| 従業者数 | 30 | 5 | 736 | 71 |

因みに、28年前の1975年においては、事業所数の総数は835、従業者数は2,557人、製造業は590事業所で1,505人、サービス業は86事業所で440人の従業者であった。もちろん、この製造業のなかでも代表的なものが、丹後ちりめんであることは言うまでもない。製造業事業所数376の内織物事業所は180、従業者数998人のうち339人を占め、家族従事者は262人である。また、製造業出荷額37.7億円に対して、織物の出荷額は約11億円であるが、24年前の1979年の織物出荷額71.2億円に比べれば、その激減ぶりは驚くべきものがある。

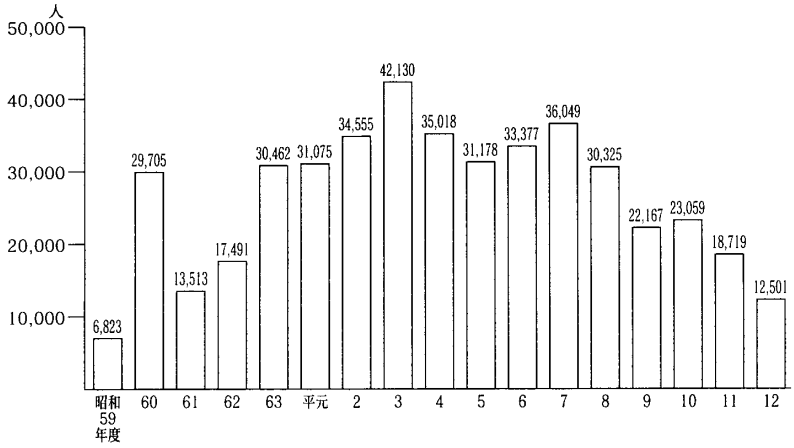
第3次産業の中心は観光業である。まず、弥栄町では、1963年のいわゆる「サンパチ」豪雪によって山間部を中心に過疎化が進み、その脱却を図る決め手として、昭和53年7月にスイス村をオープンした。当初は、山間部の豊かな自然を満喫する夏場中心の観光施設であったが、2メートルを超える冬場の豪雪を逆手に取り、1984年にスキー場を整備、通年観光を可能にした。次に、1995年町制40周年記念事業として弥栄あしぎぬ温泉がオープン、温泉祭りを行った。さらに1998年4月、「丹後あじわいの郷ゆーらぴあ」を開設、丹後地域の一大リゾート農業公園として反響をよんだ。これは甲子園球場の約8倍、34ヘクタールの敷地にヨーロッパの農村をイメージして作られたもので、「あじわい」「ふれあい」「にぎわい」を売り物にしている。

しかし、これら施設の利用状況は開設当初は盛況であったが、その後不況の関係もあって利用客数は低迷し、最近は激減の有様である。とくにスイス村森林公園は1992年のピーク時10万人、スキー場のほうは1991年の4万2千人に対し、2000年にはそれぞれ1万8千人、1万2千５百人となっている。この状況に対処するため、町はスイス村体験交流宿泊施設建設に着手し、太鼓山風力発電所の建設にあわせて、風車を望む形で施設を整備した。この施設ではトレッキングや手打ちそばづくり、さらに環境教育のための研修施設「風のがっこう」が設けられ、2002年 春にオープンした。

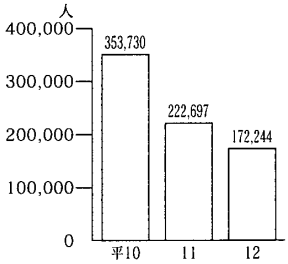
**図Ⅰ-1（スイス村森林公園入込客数）**



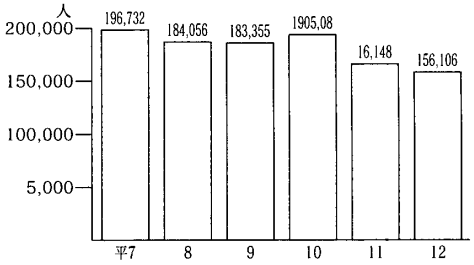

**図Ⅰ-2（スイス村スキー場入込客数）**




**図Ⅰ-3（丹後あじわいの郷入込客数）**




**図Ⅰ-4（あしぎぬ温泉入込客数）**




出所：弥栄町『2002統計資料集』

## 4．丹後ちりめん

丹後ちりめんは、生糸を素材とし、よこ糸に強い撚りをかけて織られた高級絹織物で、輝く光沢としなやかで柔らかい感触を持ち味とする。主に着物の生地として使われてきたが、最近では、帯地、服地、インテリアなど他用途にも用いられている。丹後地方は、年間190日の雨と60日の雪という大変厳しい気候であるが、湿度が高いため、絹織物の生産には最も適しているとされている。昔から「弁当忘れても傘忘れるな」と言い伝えられるほど、天気は変わりやすい。日本海上の湿った空気を西風が運び、一瞬のうちに空を曇らせる、いわゆる“うらにし”というこの地方特有の気候が「丹後ちりめん」を育んできたのである。この「丹後ちりめん」はいまから280年前、享保年間に峰山町の絹屋佐平治が京都の西陣で“シボ”の出し方を研究し、丹後へ持ち帰ったのが始まりといわれている。説明書によると、「丹後ちりめん」の命は、よこ糸にかける強い撚りである。丹後独特の“八丁撚糸機”を使い、1メートルに3000～4000回もの撚りをかけていく。生糸は二重構造になっており、フイブロインという芯にセリシンという膠質の膜が覆っている。このセリシンを残したまま製織し、後でこのセリシンを取り除く。右方向に撚った糸と、左方向に撚った糸とを交互に織り込み、セリシンを除去することによって、撚られた糸が元に戻ろうとする力が発生する。この時に右と左がケンカをし、生地に皺の様な独特の風合いの“ちぢみ”が生まれる。これを「“シボ”が立つ」というのだそうである。「丹後ちりめん」の特徴は、生地に柄を織り込むことである。これにはジャガード機を用いて、経糸（たていと）をランダムに上げ下げし、柄を作るのである。

1960年代の最盛期には、弥栄町でも町中の機織り機がフル回転し、「ガチャ万（マン）景気といわれるほどであった。今でも家々から機織りの音が響いてくるのが聞かれるが、ひところの勢いは無くなってしまった。糸を上げ下げするために使われていた紋紙（もんがみ）は、コンピュータ化されたFDに代わられた。

## 5．高度経済成長時代以降の丹後ちりめん産業の再編成

丹後ちりめん産業は、第2次大戦後、50年代後半以降の高度成長の下で73年までは、業者数、織機台数、生産額ともに激増を示した結果、全国生糸消費量の4分の1、全国縮緬生産額の半分を産出する地場産業としてその名を馳せていた。この成長は、かつて後染絹織物産地だった同地方が、50年代後半から、西陣の先染織物産地に再編されたことによるもので、1953年ごろから、京都西陣の地価や労賃の高騰につれて、業者がその需要の多くを丹後への出機に求め、35年には丹後全域に拡大し、農家の副業として機業数を増加させて、これに対応したという経過になった。このようにして丹後地方の産地は、西陣業者の下請けとして、多くの場合1～3台の零細規模で先染物を製織する、兼業農家の家族労働により支えられることになったのである。

しかし、70年代に入って、1971年のニクソン・ショックなどの影響で、日本紡績産業の持って

いた輸出特化型産業としての比較優位性は崩壊し始め、政府が日本の養蚕業を保護する目的で講じられた74年8月の生糸の輸入一元化措置を契機として糸価が高騰し、産地の経営危機が一挙に深まった。

こうして、一方では、従来の生糸に代わって増加してきた、中国からの輸入撚糸や輸入絹織物との競争、他方では、高騰する原料生糸の狭間で、深刻な不況に落ち込んだ。さらに時代の進行とともに、消費者の着物離れなどによってニーズの低迷が、これに拍車をかける状況となった。この不況は深刻化し、75年12月には丹後織物危機突破大会が開かれ、丹後織物福祉センターで、地方自治体関係者を含め、機業者1300人が参加して、産地一体で絹織物輸入絶対反対を訴える騒ぎとなった。続いて76年、丹後以外からの織物移入の禁止を決めたものの、翌77年には4年続きの不況のため、ついに有史以来の倒産が続出し、丹後全域を震撼させた。

この年77年には、この丹後産地1264業者から、4812台の織機が買い上げられて廃棄され、同時に304業者が転廃業していった。その中で、商社と結合して有利な販売網を確保し得た機屋のみが生き残って、零細賃機業者を再編していったのである。

その後も織機の共同廃棄は続き、78年、79年、80年、83年、85年、87年、88年と、絹織物用織機、撚糸機等の廃棄が相次いだ。88年には、コンピュータ・ジャガード機の導入が広がった。88年、世界的な生糸不足により生糸相場が暴騰、需要が拡大して10年ぶりに好況を享受したが、9月以降受注は急減したのである。90年代に入ると、急増する中国産絹織物に押されて、丹後ちりめんは決定的な打撃を受けるに至った[注1]。

これらの動きはもちろん丹後ちりめんのみに見られる現象ではなくて、日本の紡績産業全体に言えることであるが、近年の消費者ニーズの多様化と低価格指向に対応しつつ、高付加価値化と差別化を求めて、内需依存型への脱皮を図るプロセスのなかでの模索過程であるともいえる。これに対応するために、設備の一層の改善による、多品種・小ロット・QR(クイック・レスポンス)の方向での企業努力が求められている。しかし、そうした企業力を持ち合わさない零細織物業者の中には、下請け系列の再編成からも脱落して、転廃業をたどらざるを得ないものも、増加しているのは事実である。

こうして、丹後ちりめん産業は、生き残るための産業としてのあり方を模索する一方、それ自体の空洞化をどうして食い止めるかという課題に向き合わされている。

注1 紡績産業の製品および原料の輸入は1973年と1989年の2回にわたって、大きく増加し、その多くは中国からのものと推定される。{参考文献 (2)}

## 資料　平成12年度『織物実態統計調査報告書』（弥栄町）調査結果の概要（原文）

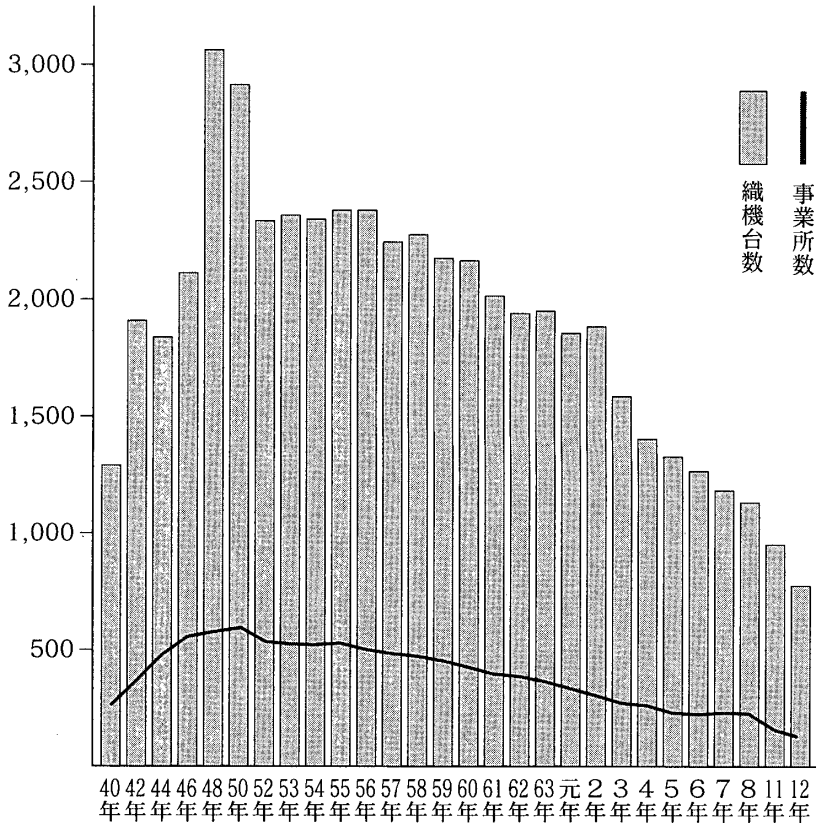
### ①事業所

平成12年12月末の事業所数は190戸で、そのうち10戸が休業している。平成12年の1年間に33戸が廃業した。稼動している180戸を経営組織別にみると、法人16戸6.1%、個人169戸93.9%である。また織物別では、後染織物のみは41戸23%、先染織物のみは133戸74.0%、後染・先染の両方は6戸3.0%である。後染が中心であった本町の織物事業所も先染が徐々に増え、昭和50年において逆転している。

**表Ⅰ-1**

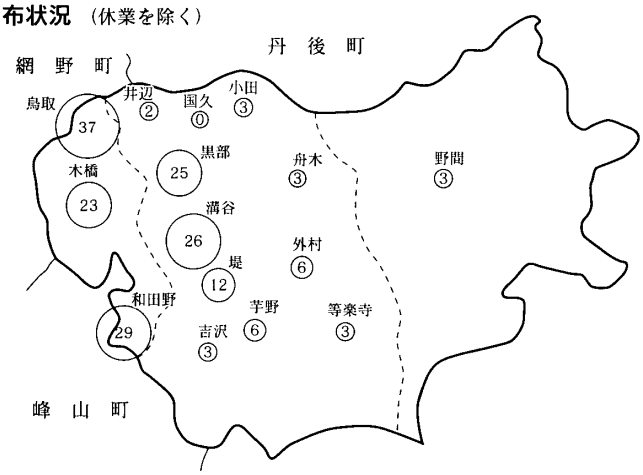
| 年度 | 事務所数 | 機械台数 |
|---|---|---|
| | 戸 | 台 |
| 37 | 127 | 903 |
| 38 | 180 | 1,026 |
| 39 | 195 | 1,103 |
| 40 | 207 | 1,235 |
| 41 | 315 | 1,657 |
| 42 | 316 | 1,863 |
| 43 | 308 | 1,741 |
| 44 | 423 | 1,764 |
| 45 | 472 | － |
| 46 | 494 | 2,188 |
| 47 | 512 | － |
| 48 | 550 | 3,191 |
| 49 | 550 | 2,825 |
| 50 | 568 | 2,800 |
| 51 | 557 | 2,603 |
| 52 | 527 | 2,298 |
| 53 | 521 | 2,323 |
| 54 | 521 | 2,313 |
| 55 | 513 | 2,344 |
| 56 | 505 | 2,337 |
| 57 | 496 | 2,203 |
| 58 | 481 | 2,231 |
| 59 | 463 | 2,129 |
| 60 | 453 | 2,118 |
| 61 | 433 | 2,067 |
| 62 | 423 | 1,942 |
| 63 | 414 | 1,947 |
| 元 | 410 | 1,882 |
| 2 | 393 | 1,854 |
| 3 | 376 | 1,590 |
| 4 | 362 | 1,464 |
| 5 | 341 | 1,384 |
| 6 | 331 | 1,328 |
| 7 | 320 | 1,270 |
| 8 | 302 | 1,229 |
| 11 | 196 | 954 |
| 12 | 180 | 739 |

**図Ⅰ-5　事業所と機械台数**




また、全世帯に対する織物事業所の割合は、9.9%となった。地区別にみた織物別については堤、鳥取、和田野においては後染織物の比率が比較的高いが、他は先染織物の比率が高くなっている。

**図Ⅰ-6 事業所の分布状況** (休業を除く)




後染：白生地に織り上げた後、染色加工すること

先染：布地を織る前に、糸のうちに色彩文様を染めておくこと

**②専業と兼業**

織物専業の事業所は91戸51%、兼業は89戸49%である。このうち、専業は溝谷・和田野・鳥取に多いが、大半は兼業である。兼業割合については小田、井辺が100%、堤(83.3%)、芋野(80.0%)、船木(66.7%)がこれに続いている。機業が主となる兼業事業所は

32戸36%、機業が従となる事業所は57戸64%となっている。昭和50年をピークとして専業事業所および機業が主となる事業所が減少しつつある。事業の内容は会社(42戸47.2%)、農業(29戸32.6%)などが主体になっている。

**③経営形態**

製造（手張・歩張）事業所は14戸7.8%、賃加工（置機）の事業所は167戸92.3%である。組織別にみると、法人のうち製造のみの事業所は6、賃加工のみの事業所2、両方の事業所が3である。また、個人では製造が26戸15.4%、これに対し賃加工は142戸84.0%と圧倒的に多い。

**④機械台数**

町内の総台数は838台で、そのうち99台が休機である。稼動している739台の一事業所平均の織機台数は4.1台となっている。これを織物別に比較すると後染織物が335台で平均7.1台、先染織物は404台で平均2.9台となっている。19回の調査から、先染織機台数が後染織機台数より多くなっている。

織物の内訳をみると大巾53台、小巾680台、二巾6台である。規模別内訳では１～３台の事業所が104戸で最も多く全体の57.8%、次いで４～６台が41戸22.8%、7～10戸が19戸10.5%、11～20台が12戸6.7%、21～30台が４戸22.8%となっている。

**⑤出荷額**

一年間の本町織物事業所の出荷額は、10億9,511万円となった。前回の調査から比較すると6,433万円の減である。

経営組織別にみると、法人７億4,134万円、個人３億5,377万円である。

経営形態別では、賃職３億8,566万円、手張５億3,521万円、その他１億7,433万円となっている。

製造・加工別では、製造が５億3,147万円で48.5%、賃加工が５億6,364万円で51.5%、後・先別に見ると後染は５億3,724万円、先染は５億5,787万円となった。

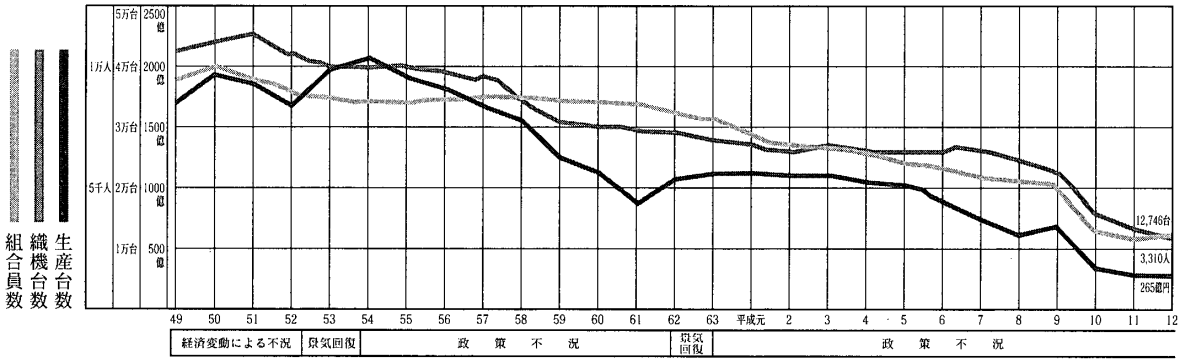
**⑥従事者**

従事者は339人で男が129人、女が210人となっており、比率は、ほぼ1対2となっている。内訳は雇用が77人（男29人、女48人）、家族従業者が262人（男100人、女162人）である。

全事業所のうち雇用のある事業所は15戸で、全体の8.3%である。家族のみによる事業所は、165戸91.7%であり、雇用者のある事業所の平均雇用者数は4.3人となっている。雇用者の規模別では、1人雇用の事業所が4戸26.7%、2人雇用が2戸13.3%、3～5人5戸で33.3%、6～10人が3戸20%、11人以上が1戸6.7%となっている。

従業者の段階別では、1人の事業所が最も多く87戸48.3%、2人が75戸41.7%、3～5人が12戸6.7%、6～10人が5戸2.8%、11人以上が1戸0.5%、一事業所あたりの従業者数は1.9人となっている。

**図Ⅰ-7　丹後機業の変換**




**参考文献**

（1）　坂本・大月・荒木・久力・西光「過疎地域における職業移動の実態―京都府弥栄町野間地区の場合―」龍谷大学『経済学論集』第11巻第3号（1971年12月）

（2）　産業学会編『戦後日本産業史』（東洋経済新報社　1995年12月）

（3）　京都府町村会『京都府町村会七十年史』（1991年10月）

（4）　弥栄町『2002統計資料集』

（5）　弥栄町『平成12年度織物実態統計調査報告書』

# 第２章 農業・農家の再編過程

## １．弥栄町産業と農業

弥栄町産業の中の農業の地位について、就業人口（表Ⅱ－1）から見る。弥栄町就業人口は高度経済成長期以降減少傾向にあり、1960年の4514人が、2000年には3084人と約3分の2となっている。ただし卸売・小売業やサービス業就業人口は増加している。製造業就業人口は一時増加したが、近年は減少し、2000年には1960年と同じ水準となっている。それに対して、農業就業人口だけは急速に減少し、2000年には1960年の14%にまでなってしまった。弥栄町産業の中でも農業就業人口の減少は著しく、弥栄町就業人口減少の最大の原因となっている。そして1960年には農業就業人口は全就業人口の61%であったのが、2000年には13%へと縮小している。以下、この農業就業人口の減少がどのようにして進んだかをたどることとする。

**表Ⅱ－1　産業別就業者数（弥栄町　15歳以上）**

| 年 | 1960 | 1970 | 2000 |
|---|---|---|---|
| 総数 | 4514 | 4120 | 3084 |
| 農業 | 2738 | 1390 | 388 |
| 林業 | 47 | 13 | 9 |
| 漁業 | 0 | － | 1 |
| 鉱業 | 5 | 2 | 12 |
| 建設業 | 125 | 196 | 336 |
| 製造業 | 890 | 1603 | 891 |
| 卸売・小売業 | 167 | 245 | 345 |
| 金融・保険・不動産業 | 46 | 51 | 54 |
| 運輸・通信業 | 58 | 92 | 66 |
| 電気・ガス・水道業 | 5 | 1 | 12 |
| サービス業 | 347 | 441 | 850 |
| 公務 | 85 | 85 | 117 |
| 分類不能 | 1 | 1 | 3 |

注『国勢調査報告』による

## 2．弥栄町農林業構造の変遷

### 表Ⅱ－2　弥栄町農業概要（旧弥栄村、旧野間村別）

| 地区 | | 旧弥栄村 | | | 旧野間村 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 年度 | | 1950 | 1970 | 2000 | 1950 | 1970 | 2000 |
| 農家数 | 戸 | 1117 | 947 | (354) | 237 | 150 | (65) |
| 専業農家 | | 639 | 70 | (48) | 156 | 25 | (14) |
| 第1種兼業農家 | | 284 | 186 | (35) | 66 | 42 | (13) |
| 第2種兼業農家 | | 194 | 691 | (271) | 15 | 83 | (38) |
| 農家人口 | 人 | 6031 | 4476 | 2183 | 1276 | 595 | 224 |
| 14歳以下 | | | 1040 | 360 | | 151 | 28 |
| 15～59歳 | | | 2583 | 1068 | | 299 | 79 |
| 60歳以上 | | | 853 | 755 | | 145 | 117 |
| 耕地面積計 | ha | 686 | 579 | 501 | 145 | 87 | 50 |
| 水田 | | 546 | 509 | 400 | 98 | 65 | 45 |
| 畑 | | 121 | 66 | 101 | 34 | 15 | 5 |
| 樹園地 | | 19 | 4 | 0 | 12 | 7 | - |
| 乳用牛 | 頭 | - | 46 | 122 | - | - | - |
| 肉用牛 | | 576 | 136 | 96 | 211 | 106 | - |
| 農業機械動力耕耘機 | 台 | | 617 | | | 101 | |
| トラクター歩行型 | | | | 138 | | | 26 |
| 乗用型 | | | | 313 | | | 56 |
| 動力田植機 | | | 9 | 276 | | - | 56 |
| バインダー | | | 57 | 74 | | - | 20 |
| 自脱型コンバイン | | | 5 | 192 | | 2 | 47 |
| 収穫面積　計 | ha | 942 | 561 | (324) | 171 | 76 | (38) |
| 稲 | | 524 | 492 | (242) | 91 | 64 | (31) |
| 麦 | | 210 | 0 | (-) | 11 | 0 | (-) |
| 雑穀 | | 5 | 0 | (3) | 6 | 0 | (2) |
| いも類 | | 75 | 13 | (17) | 21 | 3 | (1) |
| 豆類 | | 44 | 13 | (6) | 12 | 5 | (1) |
| 工芸作物 | | 16 | 5 | (x) | 7 | 0 | (x) |
| 野菜類 | | 44 | 24 | (26) | 11 | 4 | (3) |
| 花き類その他 | | 26 | 15 | (8) | 12 | 1 | (-) |
| (果樹園) | | (2) | (2) | (0) | (-) | (0) | (-) |
| (桑園) | | (17) | (2) | (-) | (12) | (7) | (-) |

注：農林業センサスの数字による　（　）内は農産物販売農家の数字である

弥栄町農業・農家の変遷を農業センサスの数字から確認するために表II－2を作成した。弥栄町は、1955（昭和30）年に弥栄村と野間村が合併して誕生したのであるが、弥栄村と野間村の農業のあり方は大きく異なり、その合計された弥栄町の全体の数字をたどるだけでは、弥栄町農業の推移の特徴を把握することはできないので、ここでは旧弥栄村地区（以下弥栄地区）と旧野間村地区（以下野間地区）を区分して見てゆくこととする。

### A　農家人口、農家戸数の減少と廃村の出現

農家人口は、両地区とも急減しているが、野間地区のほうがより減少し、2000年には1950年の18%となり、老齢化も進み、60歳以上の人口が52%にまでなっている。

農家人口の老齢化により農業従事者も高齢化し、2000年には農業就業人口の平均年齢は弥栄地区で64歳、野間地区で68歳、基幹的農業従事者の平均年齢は弥栄地区で67歳、野間地区で70歳となっている。

農家戸数も激減しているが、そのなかで弥栄地区では第2種兼業農家が増加しているのに対し、野間地区では第2種兼業農家も増えているが、専業農家が22%と弥栄より高くなっている。老人専業農家の比率が高くなっているということである。

なお、人口・農家戸数が減少した結果、13集落あった野間地区で、より山間部にあり、交通不便だった3集落が廃村となり、また住民が1桁台となった集落が2集落みられることとなった。

### B　耕地と農業生産の縮小

耕地も両地区で激減しているが、特に野間地区農家の経営耕地は、2000年には1950年の35%にまで減少している。その中で、樹園地（主として桑園）はなくなっている。

耕地の減少により、耕種生産は減少している。その中で稲作は減少しているが、主要な地位を保っている。麦はなくなり、雑穀・いも・豆は激減している。

養蚕は、1950年弥栄で176戸が桑園17ha、野間で17戸が桑園12haを基盤に行なっていたが、その後衰退し、消滅している。

ただし弥栄地区では、工芸作物と野菜の生産が目に付く。新たに進められた国営農地開発による畑の増加を利用したものである。

### C　旧来の畜産の後退と新しい畜産の導入

家畜のうち主要なものは牛である。1950年当時は弥栄地区で486戸の農家が576頭の和牛を、

野間地区では178戸の農家が211頭の和牛を飼養していた。乳牛は0であった。しかし2000年には弥栄地区で3戸の農家が乳牛122頭、和牛は13戸の農家が96頭飼養し、野間地区では牛の飼養は0となっている。これは従来の和牛の飼養はなくなり、新たに弥栄地区でだけ多頭飼育の畜産農家が出現したからである。

### D　薪炭生産の衰退

1960年林産物を販売・自家消費などしたのは弥栄地区で467戸、野間地区で190戸あり、そのうち木炭・薪などを販売・自家消費したのは弥栄地区422戸、野間地区182戸とある。弥栄地区で44%、野間地区で89%の農家が何らかの形で林業により生活を支えていた。しかし薪炭生産も急速に衰退した。

### E　農外兼業の増加

農業生産が縮小傾向を見せるということは、農家の生活はそれだけ農外兼業に依存しなければならないということである。農外兼業の深化は兼業農家数の推移からもうかがえたが、2000年の農産物販売金額規模別農家数を見ると、自給的農家と農産物販売農家のうち農産物販売金額規模50万円未満・販売なし農家は、弥栄地区で総農家494戸のうち345戸（70%）、野間地区で73戸のうち57戸（78%）であった。大部分の農家が主として農外収入すなわち兼業に依存しなければならないという状況がうかがえる。2000年に販売金額200万円以上の農家は、弥栄地区で63戸（総農家494戸の13%）、野間地区では0であった。

### H　農業経営の発展

従来の農業生産は全体としては縮小傾向にあるが、その内部では発展も見られる。経営耕地規模別農家数（表II－3）を見ると農家数は激減しているが、一部の農家は経営規模を拡大していることがうかがえる。特に弥栄地区では2000年には3haを超える規模の耕作農家が36戸出現し、農家の耕作面積の40%あまりを集積していると推定できるのである。上層農家の生産に占める地位の強まりがうかがえる。ただし、野間地区では経営の全般的縮小傾向が見られる。1戸だけ3ha経営が見えるが、この経営は居住する地域ではなく他町村で借地経営を行なっているのであり、地区内では3農家から0.5haを借り入れして経営しているだけで、野間地区内では経営規模拡大は困難なようである。一部の農家での畜産経営の発展も前記のとおり弥栄地区で見られているのである。

## 表Ⅱ－3　耕地規模別農家数・耕作面積（推定）弥栄町地区別

| 地区 | 旧　弥　栄　村 | | | 旧　野　間　村 | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 年度 | 1950 | 1970 | 2000 | 1950 | 1970 | 2000 |
| 耕地面積別農家総数　　戸 | 1117 | 947 | 494 | 237 | 150 | 73 |
| 0.3ha未満 | 210 | 249 | 141 | 20 | 17 | 8 |
| 0.3～0.5 | 260 | 238 | 92 | 56 | 41 | 17 |
| 0.5～1.0 | 510 | 285 | 133 | 148 | 78 | 38 |
| 1.0～1.5 | 127 | 135 | 55 | 12 | 14 | 8 |
| 1.5～2.0 | 9 | 28 | 16 | 1 | － | 1 |
| 2.0～3.0 | 1 | 12 | 21 | － | － | － |
| 3.0～5.0 | － | － | 19 | － | － | 1 |
| 5.0ha以上 | － | － | 17 | － | － | － |
| 耕地面積別耕地面積（推定）ha | | | | | | |
| 総数 | 695 | 567 | 515 | 153 | 95 | 52 |
| 0.3ha未満 | 32 | 37 | 21 | 3 | 3 | 1 |
| 0.3～0.5 | 104 | 95 | 37 | 22 | 16 | 7 |
| 0.5～1.0 | 383 | 214 | 100 | 111 | 59 | 29 |
| 1.0～1.5 | 159 | 169 | 69 | 15 | 18 | 10 |
| 1.5～2.0 | 16 | 49 | 28 | 2 | － | 2 |
| 2.0～3.0 | 3 | 3 | 53 | － | － | － |
| 3.0～5.0 | － | － | 77 | － | － | 4 |
| 5.0ha以上 | － | － | 131 | － | － | － |

注：農業センサスの数字により作成。耕地面積は、各階層の平均面積に戸数を乗じて算出した。

それでは次に、弥栄地区における農業経営展開農家の事例と、野間地区における農業縮小過程について、記しておくこととする。

## 3．弥栄町農家の農業経営事例

### 1） R・I家

R・I家は、旧弥栄村黒部に所在する大規模経営農家である。

前経営主であるR・I氏は、1927（昭和2）年生まれであるが、1951（昭和26）年25歳のとき養子として当家に入り、当初はしばらく勤めていたが、当時は勤めより農業のほうが収入がよいと判断して、農業専業となった。

1953年には、0.75haの水稲と台所で育雛した鶏計400羽の飼養などで18万円の収入をあげた。その後鶏のほかに豚や山羊も飼い、昭和30年代には7桁農業を目指した。1971年には水田2.55ha、畑0.43ha（葉タバコなど）の経営で、粗収入272万円を得た。さらに1982年には4haを基盤に葉タバコ、かぶ栽培にも手を広げ、粗収入976万円を得た。1991年に息子さんに経営委譲したときには、経営面積は6.7ha、農業粗収入1362万円に達していた。

このような経営規模拡大の技術的基礎として農業機械化が進められたのであるが、当家では、1956年に足踏み脱穀機を発動機脱穀機へ換えたのをはじめとし、1959年に和牛を売り、テイラーを購入、1960年耕うん機、1966年籾摺機、1967年乾燥機、1970年バインダー、草刈機、1972年コンバイン、田植機、1973年トラクター、1976年軽トラックを購入してきた。

なおR・I氏は、夫婦で農業経営を発展させると同時に区長、町会議員、町会議長、助役を始め種々の委員を歴任し、また国営農地開発事業の推進委員長をも務めてこられた。

息子さんは1978年から農協勤務をされていたが、経営委譲されたときから農業専業となり、4～5年は父親と共同で経営してきたが、現在は、水田10ha、畑3ha（うち自作地は水田1.3ha、畑1.0ha）の経営を行っている。そのための農用機械の装備状況は、軽トラック2台、トラクター大型2台、同小型1台、4条刈りコンバイン1台、5条植え田植機1台、乾燥機2台、籾摺り機1台、精米機1台である。近年、それらの機械を収納する農機具庫を建設した。

当家の経営水田は自分の居住している黒部に集まっているが、水田10haのうち2.7haは転作田として休耕しており、1haは加工米を栽培し、残りは稲だけ栽培している。畑3haは、国営農地開発事業で造成された畑2haと自作地1haであるが、採種用大根0.4ha（タキイ種苗と契約）、甘藷0.5ha（JAから京果へ出荷）、大根・蕪2ha（漬物業者西利と契約）、水仙の球根0.5ha（岩滝の種苗業者と契約）を栽培した。しかし、タキイ種苗は委託先を中国に移し、また水仙の球根も業者が輸入品に切り替えるとのことで、作付けを止めざるを得ない。なお当地域では国営農地開発事業の進行により、一時中断していたタバコ栽培の導入がふえる傾向が見られるということである。

なお現在の経営は息子さん（46歳）が中心となって経営している。息子さんの奥さんは公務員として勤務されている。自作地以外の耕地は小作契約を結び、水田10a当たり12,000円～17,000円で、国営開発農地の場合は10a当たり15,000円で借り入れている。

### 2）㈲くらぶ　ふあーまあー

くらぶ　ふあーまあーは、10名の出資者により有限会社という形態をとった農業協同経営組織である。出資金は、とりあえず5万円でも10万円でも出して仲間になろうといって出し合ったが、現在1口5万円、1人の出資額は最低10万円、最高100万円（3名）となっている。会社の当初の資金は、京都府から750万円（建物建設費の半額分）の補助金、JAからの借入金1200万円、個人からの借入金600万円、出資金470万円であった。出資者10名のうち土地持ちの兼業農家（土建社長、機業、水道屋、整備士などの兼業従事）は6名とのことである。そのほかはサラリーマンなど趣旨に賛同して参加している人である。有限会社にしたのは助成対象になりやすい、またネームバリュウもあると考えたからであった。5年間は無配当でやることとなっている。

設立は、農事組合の組織は小さい農家には適合的ではない、しかし小さな農家の耕地を守るべきだという発想から始まった。当初は集落農家に集まってもらって趣旨説明したが賛同者がなく、有志で共同作業しようということとなったのであった。

設立して2年間は専業農家から、われわれのテリトリーへ入るなとたたかれ、田も貸してもらえなかったが、専業農家は耕作に便利なところしか作らず、専業農家が作れないところもあり、耕作を頼みにくる人が増えてきた。

現在の会社の施設・装備は、事務所・出荷場・作業場となる建物、トラクター、コンバイン、田植機、リフト、乾燥機、調製機、保冷庫、ビニールハウス9棟である。

運営は、毎月5日に定例会を開き計画をたて、実質は8名が必要に応じて作業に従事している。社長70歳と常務60歳の2人が、月のうち半分以上は仕事に出（1日5,000円、月13日の出役分として、月65,000円貰う、ただし実際の出役はそれ以上である）、その他33歳、40歳、50歳、60歳、60歳、60歳の計6名が、多い人は年間1カ月は出役し、1万円～5万円のご苦労さん代を貰っている。専務はパイロットの役割をしているが、別に事業をしているので、くらぶ・ふあーまあーの仕事は5年間無報酬でやっている。なお作業に出たときの昼食や1杯飲んだときの費用なども構成員の日当にあたるとされている。

現在は、水稲3.6ha、転作のそば1.1ha、玉ねぎ0.3ha、ハウス9棟（2,200㎡、みずなや水稲の苗作り）を経営している。

水田3.6haのうち社員の提供しているのは計1haくらいで、他は集落の人9名と小作契約を結び、預かっている。

野菜のうち、みずなは3.5aに作付けし、25～30万円分の収量があり、9月から3月に栽培してきた。夏場は暑いので作業は9時までしかできない。昼はみずなはしおれ、午後4～5時になるとまたしゃんとしてくる。しかし、夏場は25日で収穫できるので、これからは周年で年4回栽培してみようとしている。みずな栽培は潅水がポイントであり、肥料はあまり問題ではない。虫は農薬が使え

ないので、ネットで防いでいる。土壌消毒は年1回、1年に1回犂起こすだけである。後は管理機で作業する。みずなは、ダンボールの箱に入れ、重くないので年寄りでも運べる。（かぶらは10個持てといわれても持てない。）今はパート労働も利用している。みずなは、JAを通して「京野菜」として東京まで持っていっており、需要はまだ見込めるとされている。

売り上げは、初年度600万円、2年目750万円、3年目900万円、4年目1100万円、今年は1200万円であった。1200万円のうち米は350～400万円、とも補償80万円、その他という収入構成である。そばや玉ねぎなどは朝市に出している。

今年は決算上は88万円の黒字となったが、減価償却の積み残しにあて、また借金せずにリフト、保冷庫、ハウス1棟を建てた。

今後は、耕地を預けにくる人もあるが、今の態勢では2人の労働力を中心として10haが限界で、むしろ経営はハウスの比重を増加し、稲作とハウス栽培は半々にやりたい。ただし現在のハウスのあるところに隣接した所を借りて経営地を広げたいが、貸してもらえない。

この集落は、圃場整備をやり、豆を作ったが儲からず、営農組合も2～3年でつぶれたこともあり、さらに一匹狼が多いのではないか。集落営農をやろうとしても参加する人がない。この組織は、農地を守るという夢の実現を目指しているので、10年・20年がんばり、仲間が新たに入ってくれる組織にしたいということであった。

### 3） 野間地区の農業経営

以下は主として弥栄町吉野の区長S氏から聞いた野間地区の農業経営の推移の概況である。

野間地区の標準的農家は、従来は炭を焼き、養蚕をして現金収入を得、牛を1頭飼養し、米や雑穀を自給的に栽培していた。

1950年の農業センサスでは、焼畑・切替畑として弥栄地区で30戸が0.85ha、野間地区で108戸が2.01haを経営していたと記録されている。焼畑（かりゅう）は、自給的な雑穀栽培をするため行なわれていたのである。焼畑を行うところは、山の上のほうにあった。上のほうが肥えているからである。面積は3～4反まとまったところを共同でやったこともあったが、普通3～4畝で、お盆の前に刈って、乾かして、お盆のあとに火をいれた。火は夕方に入れたが、2～3時間で消えた。山に延焼した場合もあり、ひやひやだった。ただし8月は山はあまり燃えることはなかった。危険なところは4～5人でやることもあった。焼いた後少し日をおいて、8月下旬に蕎麦か大根を播く。翌年は粟か小豆を播く。3年目は土地を見て造林するか、そのまま数年放置し、また焼畑にするかした。放置すると山の芋ができた。炭焼きのための伐採跡地は焼畑にはしなかった。木は下のほうは燃えないからということであった。

1960年野間地区農家214戸のうち自営兼業農家103戸、そのうち89戸は製炭・製薪業、4戸が

育林業従事となっている。当時、吉野集落22戸で炭焼き窯は23～4はあった。手間のある家では窯が2つある家もあったのである。炭焼きのため大体9月から正月まで山に入り、寒中はなだれがあって危険でもあり休み、3月から5月の田植えまで、朝暗いうちから夜暗くなるまで仕事した。炭の原木は1年に2反の山の松・杉以外の雑木（樫の木はよい、ねむ・たもはよくない、しい・くりも建築材にはよいが炭にはだめ）を使い、年間15kgの俵を300俵焼いた。夏場は田や養蚕があり、体力の消耗も激しいため炭は焼かなかった。1窯4～5俵であるが、大きい窯は15俵焼くのもあった。炭は農協を通して京阪神へ出荷していた。

炭の原木を伐ってから後、その土地は30年するとまた炭の原木として伐採できるように木が育つが、ガス・石油を使うようになってきたので、植林するようになった。植林したら40年後に伐採することができるようになるので、1反ずつでも植えて老後はその収入で暮すつもりだったが、失敗だった。松杉檜は、輸入材に押されて、建築用材としても使われなくなり、収入にならなくなった。

養蚕は、当地域は雪のため桑の木は大きな桑に仕立てて、飼育していたが、だめになったので、桑園には桧と杉を植えた。

牛は1頭飼育していたが、昭和41年から競馬協会の補助金をもらって、多頭飼育をすることとなった。6人の共同利用する畜舎のなかで、牛の管理は個人がするかたちで、大豆・ふすまなども与え、最高8頭飼育したことがあるが、（他の人は2～3頭ないし6頭飼育）長くは続かなかった。畜舎は8年前まで使っていたが、今は農機具などの収納場所となっている。

野間地区の米は、炭よりも収入が少なく、野間地区の米は地区内で消費していた。S氏は小学2年生のとき7人家族で米を買って食べたことがあるのを覚えている。昔は人口も多く、麦はご飯に混ぜて麦飯として食べた（麦を飼料として牛にやるような贅沢はしなかった）。しかし米は肥料や薬をやるようになり、6俵の収量が今は8～9俵採れるようになり、麦は食べなくてもよくなった。

平成元年から基盤整備が進められたが、山の谷はほっておくとすぐにねむの木などが大きくなり、山にかえるし、老齢化が進んできたので、安全に機械を使って楽に農耕を行うため、10a当たり40万円足らずの自己負担をして進めたのであった。自己負担の資金は個人の一括払いが多かった。いざという時のための貯金は持っていたのである。

しかし、今は夢も希望もなく、街に住んでいる子供たちが、退職したら帰郷してくれるのを期待している状況の人が多い。

## 4）結　語

以上、弥栄町農業・農家の近年の状況を見てきた。筆者は、1971年に弥栄町を訪れ、当時進行しつつあった過疎化の厳しさを見聞した。その当時と現在を比較すると、過疎化の進行をもたらし

た大きな構造的枠組みの変化の傾向は昔のとおり現在も貫徹し、過疎化は一層深刻化している。1970年当時は、過疎化が進行し始めたが、しかしまだ多くの農業展開の努力と前進の芽が感じられた。その後も観光事業では新たな前進が見られ、また弥栄地区では農業経営の新しい展開事例も見られるが、観光事業を見ても最近は入りこみ者が増加せず、苦しい面もあるようであり、さらに丹後機業の空洞化が急速に進みつつある中で、全体として農業・農家の経営と生活の向上は厳しさを増しているようである。とくに野間地区では現在農業を維持している世代の交代が到来するときには、地域の存続がどのような状況となるのか危ぶまれる。集落再編成も含め、大きな構造転換に迫られているようである。

上記にもその一部を記したが、実に貴重な地域資源の利用が放置されてきている。これから農業が基幹産業として位置づけられて適切な保護を受け、貴重な地域資源の有効な再利用により、新たな前進を遂げ、同時に地域の重要な産業であった機業の空洞化が克服され、地域の経済と生活の向上が実現する方向と条件をさらに考えたい。

# 第３章　人口減少地域と高齢者問題

## １．はじめに

「過疎地域」という言葉が良く聞かれるが、過疎問題が社会的な問題となりだしたのは、昭和30年代に始まった高度経済成長が進行する時期に重なってきている。そして、法律として対応されだしたのは、昭和45年の「過疎地域対策緊急措置法」からである。その後、昭和55年の「過疎地域振興特別措置法」、平成2年の「過疎地域活性化特別措置法」である。今回訪れた京都府竹野郡弥栄町は、京都府内でも人口減少傾向が目立つ京都北部丹後地域の丹後半島の中央に位置する町である。丹後半島には、1市9町のうち2町を除き、全て人口減少傾向が生じている。今日の少子化傾向と重なり、将来、益々人口減少が進行することが予測されるが、弥栄町の現状についてみていきたい。

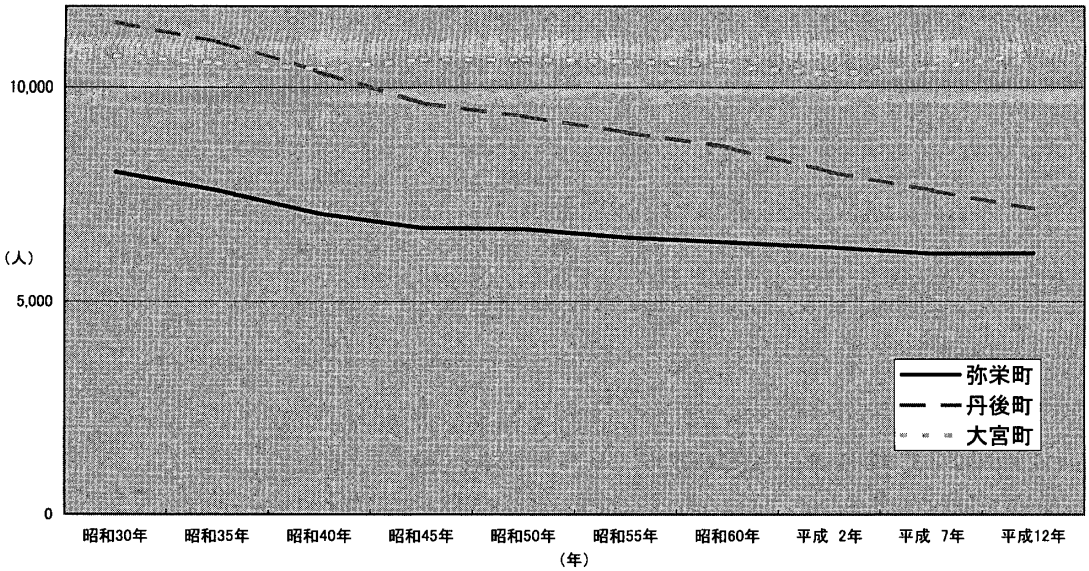
## ２．弥栄町における人口減少過程について

弥栄町は、昭和30年に弥栄村と野間村の合併によって誕生したが、弥栄村は昭和元年に、野間村は明治22年に出来た村である。しかし、この弥栄地域は歴史的に見て古く、「古代」と呼ばれる時代より人々の生活していた跡が、数多くの古墳や遺跡から出土される埋出物によって証明されている。中世から近代、現代にかけても日本海貿易、ちりめん産業などで栄えた地域であった。

しかし近年、弥栄町は人口の減少傾向が止まらず、大正9年の第1回国勢調査時の人口は7,720人であった。その後昭和22年、25年、30年の時点では、8,000人を超していたが、それ以外ではコンスタントに7,000人台を維持していた。しかし、第二次大戦後わが国で高度経済成長が起こり、経済発展が本格化するにつれ地域外へ人口が流失し、地域人口が減少しだした。昭和40年代後半から50年代前半にかけて2度にわたる「ちりめん産業」の隆盛期を迎え、経済的には潤いを持ったが人口の減少は続き流失に歯止めはかけられなかった。戦後の経済発展、なかでも高度経済成長およびその後の産業構造の変化、さらに人々の生活スタイルの変化が弥栄町の定住人口の減少を起こしたという形があらわれてきている。

図Ⅲ－1、表Ⅲ－1は、昭和35年以降の国勢調査からの「弥栄町の人口推移」を示したものであるが、昭和35年には7,609人であった人口が平成12年では6,132人に減少している。上述したように年々減少が続き、昭和45年の調査で7,000人を割ってから6,000人台を記録し続け、今日では6,000人前半にまで落ち込んでいる。ただ、「過疎地域自立促進特別措置法」にいう「過疎地域」には弥栄町は、該当していない。

**図Ⅲ－1　人口推移**




資料：平成12年京都府統計書・平成12年国勢調査から作成

**表Ⅲ－1　人口推移**

| | 弥栄町 | 丹後町 | 大宮町 |
|---|---|---|---|
| 昭和30年 | 8,027 | 11,620 | 10,743 |
| 昭和35年 | 7,609 | 11,131 | 10,546 |
| 昭和40年 | 7,051 | 10,324 | 10,400 |
| 昭和45年 | 6,722 | 9,661 | 10,640 |
| 昭和50年 | 6,701 | 9,346 | 10,642 |
| 昭和55年 | 6,501 | 8,956 | 10,597 |
| 昭和60年 | 6,388 | 8,611 | 10,486 |
| 平成 2年 | 6,275 | 8,042 | 10,291 |
| 平成 7年 | 6,125 | 7,607 | 10,416 |
| 平成12年 | 6,132 | 7,164 | 10,805 |

資料：平成13年京都府統計書・平成12年国勢調査から作成

このことは、町として地域に対する取り組み――このことについては後で述べたい―や従来からの生活している人々、その人々による産業がまだ機能しているからである。しかし、これも後で見るが、弥栄町においても「高齢化」が進行しており、町としても新たな問題を生み出している。

表Ⅲ－2は「弥栄町の流失入人口」について見たものであるが、通勤・通学者が多いことに気がつく。そこで、弥栄町の立地状況について見ると。前傾されているように丹後半島のちょうど真ん中に位置し、周りを取り囲むように宮津市、網野町、丹後町、伊根町、大宮町、峰山町がある。典

型的な山村地域である。ただ海にも近く、また隣接している市や町とは近年道路網が良くなり移動が容易である。このことが通勤・通学を可能にし定住人口の減少を辛うじて軽減しているといえる。

### 表Ⅲ－2　流出入人口

(平成7年)

| | | 弥栄町 | 丹後町 | 大宮町 |
|---|---|---|---|---|
| 流出 | 総数(人) | 1314 | 1029 | 2269 |
| | 割合(%) | 21.5 | 14.4 | 21.8 |
| | 通勤(人) | 1093 | 791 | 1881 |
| | 通学(人) | 221 | 238 | 388 |
| 流入 | 総数(人) | 660 | 337 | 1355 |
| | 通勤(人) | 559 | 302 | 1354 |
| | 通学(人) | 101 | 35 | 1 |
| 昼間人口(人) | | 5471 | 6915 | 9502 |

資料：平成13年度京都府統計書・平成7年国勢調査から作成

### 表Ⅲ－3　集落別人口・世帯数及び旧村落別人口・世帯数の推移

| 区分 | 昭和30年 | | 昭和35年 | | 昭和40年 | | 昭和45年 | | 昭和50年 | | 昭和55年 | | 昭和60年 | | 平成2年 | | 平成7年 | | 平成12年 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 人口 | 世帯数 | 人口 | 世帯数 | 人口 | 世帯数 | 人口 | 世帯数 | 人口 | 世帯数 | 人口 | 世帯数 | 人口 | 世帯数 | 人口 | 世帯数 | 人口 | 世帯数 | 人口 | 世帯数 |
| 吉沢 | 543 | 109 | 504 | 103 | 447 | 99 | 424 | 98 | 411 | 98 | 389 | 98 | 345 | 98 | 325 | 95 | 319 | 97 | 308 | 104 |
| 芋野 | 334 | 64 | 300 | 58 | 276 | 61 | 276 | 64 | 281 | 68 | 278 | 71 | 274 | 71 | 308 | 84 | 328 | 89 | 310 | 89 |
| 堤 | 398 | 80 | 381 | 75 | 364 | 79 | 444 | 103 | 456 | 108 | 423 | 106 | 441 | 124 | 468 | 131 | 580 | 167 | 592 | 184 |
| 溝谷 | 719 | 154 | 748 | 148 | 777 | 164 | 804 | 186 | 951 | 239 | 979 | 245 | 1,017 | 264 | 984 | 266 | 931 | 266 | 1,051 | 285 |
| 外村 | 490 | 93 | 484 | 93 | 446 | 91 | 396 | 94 | 367 | 90 | 347 | 85 | 347 | 86 | 357 | 84 | 332 | 84 | 303 | 84 |
| 等楽寺 | 507 | 103 | 450 | 102 | 371 | 88 | 259 | 62 | 223 | 56 | 192 | 50 | 161 | 47 | 157 | 45 | 130 | 41 | 120 | 43 |
| 船木 | 187 | 39 | 182 | 37 | 168 | 39 | 150 | 40 | 144 | 37 | 132 | 35 | 125 | 34 | 120 | 34 | 119 | 33 | 116 | 32 |
| 黒部 | 875 | 177 | 849 | 177 | 855 | 188 | 876 | 203 | 910 | 218 | 885 | 229 | 895 | 229 | 906 | 239 | 853 | 234 | 864 | 252 |
| 小田 | 123 | 20 | 113 | 20 | 103 | 19 | 98 | 19 | 84 | 18 | 86 | 19 | 91 | 19 | 92 | 19 | 85 | 18 | 76 | 20 |
| 国久 | 136 | 27 | 125 | 26 | 115 | 25 | 114 | 25 | 103 | 26 | 104 | 25 | 109 | 24 | 109 | 25 | 103 | 24 | 99 | 25 |
| 井辺 | 169 | 32 | 165 | 32 | 158 | 32 | 143 | 32 | 145 | 33 | 160 | 35 | 161 | 35 | 174 | 36 | 167 | 35 | 169 | 37 |
| 鳥取 | 710 | 135 | 720 | 126 | 695 | 136 | 707 | 146 | 686 | 146 | 673 | 150 | 649 | 150 | 618 | 151 | 604 | 150 | 600 | 158 |
| 木橋 | 584 | 99 | 537 | 95 | 545 | 105 | 512 | 112 | 508 | 113 | 477 | 113 | 457 | 113 | 441 | 112 | 428 | 116 | 429 | 114 |
| 和田野 | 995 | 207 | 973 | 208 | 974 | 221 | 911 | 219 | 928 | 232 | 919 | 231 | 920 | 243 | 871 | 235 | 840 | 241 | 829 | 247 |
| 川久保 | 51 | 8 | 42 | 8 | 26 | 6 | 17 | 6 | 12 | 6 | 3 | 2 | 1 | 1 | － | － | － | － | － | － |
| 田中 | 76 | 14 | 63 | 14 | 42 | 11 | 32 | 9 | 38 | 9 | 44 | 9 | 44 | 9 | 40 | 9 | 33 | 9 | 24 | 9 |
| 中津 | 130 | 30 | 117 | 28 | 88 | 24 | 86 | 21 | 72 | 19 | 72 | 20 | 68 | 21 | 57 | 17 | 45 | 16 | 36 | 13 |
| 中山 | 65 | 12 | 57 | 12 | 48 | 11 | 50 | 11 | 38 | 9 | 31 | 10 | 26 | 9 | 20 | 8 | 19 | 7 | 16 | 6 |
| 野中 | 209 | 41 | 173 | 37 | 150 | 39 | 133 | 34 | 121 | 33 | 108 | 31 | 100 | 29 | 93 | 29 | 76 | 27 | 67 | 26 |
| 吉野 | 111 | 21 | 91 | 20 | 79 | 19 | 76 | 18 | 64 | 17 | 66 | 17 | 53 | 17 | 49 | 17 | 51 | 17 | 47 | 16 |
| 来見谷 | 79 | 17 | 64 | 16 | 55 | 15 | 50 | 15 | 39 | 14 | 28 | 13 | 20 | 11 | 15 | 10 | 21 | 10 | 15 | 6 |
| 大谷 | 66 | 14 | 52 | 12 | 24 | 9 | 17 | 7 | 14 | 6 | 12 | 6 | 8 | 3 | 6 | 3 | 4 | 3 | 4 | 3 |
| 味土野 | 162 | 34 | 161 | 33 | 103 | 25 | 34 | 12 | 10 | 4 | 8 | 4 | 6 | 4 | 6 | 4 | 7 | 5 | 7 | 5 |
| 霰 | 80 | 18 | 76 | 18 | 67 | 16 | 60 | 17 | 56 | 17 | 50 | 16 | 42 | 15 | 38 | 15 | 34 | 14 | 37 | 15 |
| 須川 | 140 | 32 | 89 | 24 | 75 | 22 | 53 | 17 | 40 | 14 | 35 | 12 | 28 | 9 | 21 | 8 | 16 | 7 | 13 | 8 |
| 住山 | 55 | 11 | 67 | 14 | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － |
| 小杉 | 33 | 7 | 26 | 6 | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － |
| 計 | 8,027 | 1,598 | 7,609 | 1,542 | 7,051 | 1,544 | 6,722 | 1,570 | 6,701 | 1,630 | 6,501 | 1,632 | 6,388 | 1,665 | 6,275 | 1,676 | 6,125 | 1,710 | 6,132 | 1,781 |

(資料：国勢調査)

資料：平成15年弥栄町統計資料より

だが、町内では人口移動が激しく、人口に関して異なる問題が起こっており、町の姿が変化しかねない状況である。表Ⅲ－3に示されているように、弥栄町内の各集落の人口が「黒部」、「溝谷」、「堤」といった町の中心部にある地域に集中し、「田中」、「中津」、「野中」、「吉野」、「霰」、「須川」といった集落では大幅な人口減少を示している。中には集落そのものが存続出来ないで無くなったところも出ており、町内で激しい変化――過疎化―が起こっている。すなわち、弥栄町としては「過疎地域」ではないが、弥栄町内においては、「過疎地区」という状況が生まれているのである。上述の「人口の流出入」の状況と合わせてみると、町の中心部に人々が集まり、そこから町外への通勤、通学を行い、生活している姿が出てくる。このことは、弥栄町の生産分野、生活分野において大きな変化が生じていることを示している。

## 3．弥栄町の現状と今後の取り組みについて

1のところで弥栄町の人口の減少についてみたが、図Ⅲ－1、表Ⅲ－1において丹後町と大宮町の人口推移もあげていた。丹後町は、大正9年の第1回国勢調査においては11,698人であり、大宮町では8,913人の人口を有していた。丹後町では、弥栄町と同様に昭和35年から減少傾向が始まり平成12年の時点では7,164人にまで落ち込んでいる。ところが、大宮町の場合ほぼコンスタントに10,000人台を記録し、平成12年時点でも10,805人の人口を有している。丹後町の場合減少度合いが大きく、「過疎地域自立促進特別措置法」で言う「過疎地域」に該当する状況である。大宮町は、大正9年時点では弥栄町とあまり差がない状況であったが、昭和22年に10,024人を記録してから先ほど述べたように10,000人台を維持している。丹後町における急激な人口減少傾向と大宮町における人口維持については、今後の弥栄町における町の方向を考えるうえで一つの参考になるのではないか。

**表Ⅲ－4　弥栄町の「0～14歳人口と65歳以上人口」**

| | 総人口（人） | 0～14歳（人） | 割合（%） | 65歳以上（人） | 割合（%） |
|---|---|---|---|---|---|
| 平成2年 | 6275 | 1224 | 19.5 | 1301 | 20.7 |
| 平成7年 | 6125 | 1112 | 18.1 | 1437 | 23.5 |
| 平成12年 | 6132 | 1037 | 16.9 | 1667 | 27.2 |
| 丹後町（12年） | 7164 | 1089 | 15.2 | 2055 | 28.7 |
| 大宮町（12年） | 10805 | 1909 | 17.7 | 2360 | 21.8 |

資料：平成13年京都府統計書・平成12年国勢調査から作成

**表Ⅲ－5　弥栄町の「0～14歳人口と65歳以上人口」**

| | 平成2年 | 平成7年 | 平成12年 |
|---|---|---|---|
| 65歳以上の親族のいる夫婦のみの世帯数（世帯） | 132 | 180 | 217 |
| 65歳以上の単独世帯数（世帯） | 90 | 102 | 132 |

資料：平成13年京都府統計書・平成12年国勢調査から作成

表Ⅲ－4と表Ⅲ－5を見ていただきたい。弥栄町における「0～14歳以下人口と65歳以上の人口」についてみたもの。さらに「65歳以上の世帯の状況」についてみたものである。平成12年度における高齢者の割合は、弥栄町においては27.2%――丹後町では28.7%、大宮町では21.8%――とほぼ3人に1人の割合で高齢者となっている。しかも、平成2年では20.7%、同7年では23.5%と調査のたびに高齢化が進んでいる。一方14歳以下の人口の割合は、平成2年で19.5%、同7年で18.1%、そして平成12年では16.9%というように減少傾向がはっきりと出ている。明らかに弥栄町においては、人口減少だけでなく「少子高齢化」の状況をしめしている。ちなみに、旧野間村地域の農業従事者の年齢について農業センサス(2000年度)から見ると、208人中84人が65歳以上である。すなわち高齢者の割合は40.4%という大変高い値を示している。

65歳以上の世帯の状況についてみていくと、「65歳以上の親族のいる夫婦のみの世帯」では、平成2年で132世帯、同7年で180世帯、そして平成12年では217世帯と増加している。また「65歳以上の単独世帯」を見ると平成2年で90世帯、同7年で102世帯、そして平成12年では132世帯と増加している。同年の単独世帯数250世帯の約53%を占めるにいたっている。また全世帯数1770世帯の約7.5%となっている。「65歳以上の親族のいる夫婦のみの世帯」で見ると12.3%である。

高齢者・高齢者世帯が増加の状況は、今後の「町づくり」において大きな課題となるといえる。一方、町の将来を担う子供たちについても触れておきたい。表Ⅲ－6は弥栄町内にある「園児・児童・生徒数」の変化について見たものであるが、減少が続き平成2年の数値に比べ12年では84%にまで落ち込んでいる。このように高齢化とともに少子化も確実に進んでおり、高齢化対策と同様に少子化対策も重要な課題である。

**表Ⅲ－6　園児・児童・生徒数**

| | 平成2年 | 平成7年 | 平成12年 | |
|---|---|---|---|---|
| 保育所園児数(人) | 253 | 210 | 208 | 平成2･7年は7ヶ所、12年は6ヶ所 |
| 小学校児童数(人) | 491 | 500 | 398 | 平成2･7･12年は5ヶ所 |
| 中学校生徒数(人) | 260 | 241 | 264 | 平成2･7は2校、平成12年は1校 |
| 合　計 | 100 | 495 | 1870 | |

※保育所・児童数については、弥栄町健康福祉課調べ。小学校・児童数、中学校・生徒数については、学校基本調査（5月1日現在）から

資料：平成15年弥栄町統計資料より

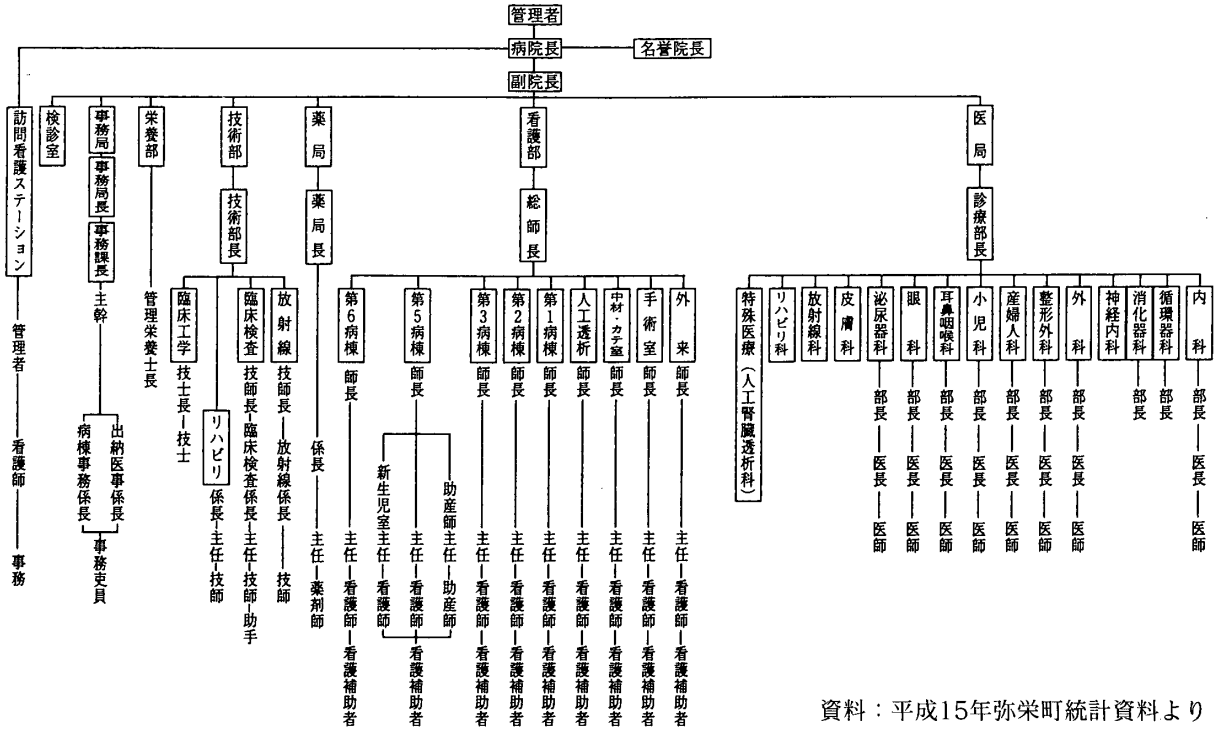
## 4．弥栄町における医療・福祉対策について

### 1）弥栄町における医療体制

地域の医療の中核として、「弥栄町国民健康保険病院」がある。現在248床(療養型36床を含む)、診療科目14科――内科、消化器科、循環器科、神経内科、外科、整形外科、眼科、産婦人科、小児科、泌尿器科放射線科、耳鼻咽喉科、放射線科、リハビリテーション科、皮膚科、――を開設し

ている。他に「人工透析」、「救急医療」、「無医地区への医師の派遣」を行っている。さらに、「予防医療」にも力を入れた体制をとっている。平成5年からは、高齢化社会に対応する「訪問看護事業」を実施している。図Ⅲ－2の「弥栄町国民健康保険病院の機構図」参照してもらいたい。

**図Ⅲ－2　弥栄町国民健康保険病院機構図**　（平成14年3月現在）




資料：平成15年弥栄町統計資料より

弥栄町国民健康保険病院は、昭和23年「弥栄村国保診療所」として開設。昭和35年には、病床数250床の病院。昭和50年には、厚生省(当時)の「へき地中核病院」の指定を受ける。平成11年には、療養型病棟も併設し高齢化社会への対応をとれる体制となる。

### 2）弥栄町における福祉対策

弥栄町内には、公的施設として保健福祉センター「ふれあい」、国民健康保険病院、やさか老人保健施設「ふくじゅ」がある。

◎保健福祉センター「ふれあい」

・平成6年厚生省(当時)の国保特別対策事業として建設される。

・健康福祉課、訪問看護ステーション、ディサービスセンターの機能を持っている。

・予防と病気の早期発見への取り組み、訪問看護事業、在宅介護支援事業、ディサービス事業を行っている。

◎やさか老人保健施設「ふくじゅ」

・平成11年に建設され、地域の看護・介護の中核となっている。

・町の社会福祉協議会が町の委託で運営を行っている。

・定員100名（うち、痴呆性老人40名）の能力をもっている。

それ以外に、短期入所（ショートスティ）、日帰りの「デイケア」も行っている。

上記の施設以外に、

・野間地域――高齢化が進んでいる地域――に建設されている「生きがい交流センター」がある。

・養護老人ホームの「奥丹後養老施設組合満寿園」(養護老人ホーム)がある。

◎野間地域の状況

平成13年、野間地域は107戸280人の人々が生活している。高齢化率50%、独居老人世帯は25戸である。この地域は、冬季になると車も通れないほどの自然状況になる。平成12年に「生きがい交流センター」が建設され、近辺の10の集落のお年寄りのケアーに当たることになった。特に冬場のお年寄りの安否確認が大きな問題であった。そのため、週に1回センターに来てもらう形をとっている。ただ、来てもらうためには「目的をこしらえることが大切」となり、「食事の提供」、「健康管理」を柱にした。そのため、診療所の併設、看護師の常駐。医師が毎日午前か午後には詰めている体制を取った。利用者は1日約20名である。

現在、野間地区に生活していく環境を作るという目的で「住宅検討委員会」が設置され、宅地造成を行う方向にむかっている。ただ町の財政事情もあり、最後の決定が出来ない状況である。完成すれば、6キロ四方に点在している住居を集め、これからの高齢化社会に対応するモデルケースになるであろう。まだ予定の段階だが、味土野地域対象の計画もある。

平成12年末時点で、弥栄町内において届出がされている医師の数は24名(うち2名は、介護老人対象)であり、医師1人当たりの町民は255.5人となっている。表Ⅲ－７参照丹後町の1432.8人、大宮町の2701.3人に比べ極めて良好な状況である。ちなみに京都市では206.9人、福知山市では519.8人である。しかも介護老人の対応も可能にしているのは、丹後地域においては、弥栄町のみであり、京都府北部で見ても、弥栄町以外には綾部市、舞鶴市があるのみである。高齢化対策を町として考えている姿勢が見られるといえる。

**表Ⅲ－７　医師届出数**

| | 弥栄町 | 丹後町 | 大宮町 | 京都市 | 福知山市 |
|---|---|---|---|---|---|
| 総数(人) | 24 | 5 | 4 | 7093 | 131 |
| 医師1人当りの住民数(人) | 255.5 | 1432.8 | 2701.3 | 206.9 | 519.8 |

資料：京都府保険福祉総務課（医師、歯科医師、薬剤師調査）
平成13年京都府統計書から作成

上述してきたように、弥栄町は過疎地域ではないが長期にわたって人口の減少傾向があり、町内においても人口が町の中心部に集中するという状況である。さらに住民の20%を越す人々が弥栄町外に出かけている。また30%近くの住民が65歳以上の高齢者である。

今後増すであろう高齢化に対しては、医療・福祉対策は益々必要の度合いを増すといえる。町として「力」をいれているが、現在の良好な状況を今後とも維持してもらいたい。

## 5．結語

人口減少傾向と少子高齢化という状況は、弥栄町の今後に大きな影響を与えることは確かである。表Ⅲ－２で示したように、昼間人口の低さは町における産業の質・量とも不足していることを示している。現在弥栄町は観光産業をはじめ第3次産業に力を入れており、「スイス村」、「スイス村体験交流宿泊施設―風の学校」、「弥栄あしぎぬ温泉」をはじめ「丹後あじわいの郷(京都府農業公園)」などに運営や協力し町内の人々の余暇、憩いの場の提供や雇用の機会の拡大さらに町外の人々の誘致を行っている。しかし、町を潤すにはまだ厳しい状況といえる。

弥栄町の取り組みにおいて注目したいものがある。それは、人口減少に対しての「意識の転換」を行ったということである。従来は、人口減少に対しいかに「離村(町)者」を減らすか、止めるかという考えでの取り組みであった。それが「離村(町)者」を呼び戻すという考えになっていた。しかし今日「町」が取り組んでいるのは、「新規入村(町)者」を入れるという発想の転換である。従来の「弥栄町」ではなく、「新しい弥栄町」として再活性化していくという心構えである。それだけに、新しく町に入ってくれる人々をどれだけ呼べるかは、町としての「魅力」を出せるかにかかってきている。

平成13年に国からの援助を受け6基の「風力発電―風車」を太鼓山(伊根町)に建設し、合計4500キロワットの発電を可能にしたことは環境を考えた新しいエネルギーの供給と自然にやさしい町というイメージに役立っている。

立地的には決して有利とは言えず、財政的にも厳しい小さな町にとっては、存続そのものが大変です。しかし町として持てる知恵を活かし、町として色々努力されている姿を見て、何とか弥栄町が弥栄町の特性を生かした形で未来を創っていってもらいたいと感じました。今日「市町村の合併」が話題になっています。弥栄町も合併の検討をしているが、安易な数字合わせではなく、住民の方々にとってプラスになることを考えたものでなければなりません。それが町の発展につながるはずです。どうか、町の良さを失わず、良さが活かされる形であって欲しいことを願います。